
遊々楼閣

虹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊々楼閣

【Nコード】

N8934B

【作者名】

虹雪

【あらすじ】

ふらりと目に入った看板それに従い行くと、世にも不思議な世界が広がっていた。

前編

この道をまっすぐ行つて、突き当りを左に曲がると、右手に扉があります。そこが遊々楼閣ゆうゆうろうかくです。

そんな看板がさびれた街の一角にあつた。行き交う人々は、そんな看板があることなど気づきもしないのか、皆足早だった。

ダブグレイ、紫がかつたグレイの様な髪に、色素の薄い茶色の瞳をした呉は、暇をもてあましていたので時間つぶしにそこに行くことにした。

家と家の間にある道は、一人が通るしか使われていないのかと思つたほど、狭かつた。肩がぶつかる分けでもないが、窮屈な感じは受けた。

道は、看板に書かれていたものしかなく迷いようがなかつた。

呉の目の前にある扉は木が半腐りかけで、木臭さが鼻についた。

老朽化したコンクリートの三階建ての家の不必要な位置にある扉をノックし、丁寧に訪ねた。

「どなたかいらっしゃいますか」

声はない。もう一度同じように問いかける。手はノブの上に置いていると、ひねりもしないのに勝手にノブは回され、呉くれを引っ張るように開いた。

「ようこそ、遊々楼閣へ。お入りになって下さいまし」

目鼻立ちのはっきりした女が呉に言う。女は着物を着、肩を出し白塗りに赤い口紅を塗っていた。

「おじやまします」

丁寧に、おぼつかないながらもお辞儀までした呉に、女は気を良くした。

「番台さん。この方私が案内します。初めての方ですし、私の方がいいと思います」

女が、番台と呼ばれる場所に話しかけると、木の台から赤に金の刺繍をあしらえた布をたらし、白い百合を飾った、ホテルで言うところのカウンターのようだった。

そこから、八の字のヒゲに黒いスーツの男が顔を出す。

「はい。美音様。そちらの殿方はお名前とご住所をこちらにお書き下さいな」

男は人差し指で長方形を作ると、そこから透明で厚さ二センチほどのボードのようなものが出てきた。透明の中で光を浴びているためにそこにあることが分かった。

ボードには、あいうえお順で打て、長細い画面があった。呉は番台に従い、名前と住所を打ち込んでいった。

「こちらは、お金はどのくらいいるんですか」

「呉様のお気持ち次第です。楽しんでいただけただけお支払い下さい」

番台はそう言うと、美音に目配せして立ち去った。

「さあ。行きましょう」

美音に案内され、木張りの空間の真ん中にある、大きな赤い扉の横にある四角の中に納められた数字をいくつも押す。そして、最後に確定を押すと、扉は二つに分かれて開いた。

中は別世界のようだった。立方体の中は吹き抜けの空間に人々が宙を漂っている。気持ちよさそうな顔をして。

「何ですか。ここ」

「遊々楼閣ですわ」

「いや、そうではなくて、何故人が宙に浮いているんですか」

「遊々楼閣ですから」

呉にとっては答えにはなっていなかったが、美音はにこりと微笑むと、この遊び方を説明し始めた。

「ここには、何百通りの遊びがあるのですが、どうなさいます。それこそ宙を漂ったり、体感ゲームをしたり、冒険したり出来ますわ」

「はあ……。よく分からないんですが、リラックス出来たりするのはありませんか」

呉の間に笑みで答えて美音はエレベーターに乗り、呉も後に続いた。

美音はエレベーターの中、右端にある二十という数字を押したが、呉は首を傾げる。ここは二十階も高さのある建物だっただろうか。せいぜい五、六階だった気がすると思っていた。

外から見たので間違いはない。だが、エレベーターは高く上がっ

て行く感覚がある。五、六回をゆうに越えている。

「呉様大丈夫ですか。顔が青くなっていますよ」

「大丈夫です」

少し、震える声で呉は言ったが説得力はあまりなかった。エレベーターは静止し、音もなく開かれる。

そこには生きた金魚が宙を泳ぎ、人々も泳ぎながら移動していた。美音は付いて来るように言いながら、泳いで行く。エレベーターから出ると体は水中に入った時と同じ風に浮かぶ。呉も後を追うが、息を止めていたためもがいていると、呉とは反対側へと泳いでいた婦人にくすりと笑われた。

「息出来ますよ」

「あ。本当だ。ありがとうございます」

馬鹿丁寧な呉に、婦人はまた笑い、泳いで行った。吐いた息は泡となって上に行く。そして、近くの網目状の穴に入って行った。

美音は人魚のようにすいすい泳ぎ、二十三と書かれた部屋へと入った。

そこは、水中ではなかったためふわりと地上に降り立つ。部屋の中は、白いカプセル型のベッドが置かれていた。

壁とベッドは真っ白い。けれど床に敷かれた畳が奇妙な雰囲気を作っている。

「ここに寝て下さいな」

白いカプセル型のベッドは自動で開き、美音の言うとおり呉は従

うとまた、自動で閉じられた。

呉は白だけの世界に取り込まれた。美音の声が何かを通じて聞こえてきた。

「あなたは癒されたい。でしたら夢をみるのが一番です。あなたが癒されるまで徹底してお付き合いします」

呉は美音の言葉を薄れる意識の中で、心地よさと共に聞いていた。

体がふわふわの毛布の中にいるような気がした呉は、あたりを見渡すとそこは白い毛玉がふわふわと塊になって漂っていた。澄んだ青い空の上で。

「雲の上なのか」

驚いた呉は勢いよく飛び起きて、雲から落下してしまう。声にならない悲鳴が、口から漏れる。

ラクダ色の大地は落下とともに近くなる。涙目になり、恐怖を味わいながら念仏を唱え始めた。

思えば呉は幼い頃に一度木から落下した以来、高いところが苦手です。二度と登るまいと誓っていたはずなのに、大人になって高いところから落下するとは思わなかった呉は、夢と言っことを忘れていた。

そして地面に叩きつけられ、跳ね返る。

「はい」

疑問に声が裏返る。見ると地面はトランポリンのように柔らかく、そしてよく跳ねた。止まることなく高く跳ねながら進んでいく呉の体。

死ぬことはないと分かってても恐怖は拭えず、止めようと必死にもがいた。

抵抗虚しく、ぐったりした時にはもう呉は夜の街の一角にいた。

「うつ……うつえっ」

胃液が逆流し、胃の中のものが吐き出された。

街のネオンと冷えた空気は、呉の内蔵をいたわってくれていた。虚ろな瞳をネオンに向ける。遠くから人のざわめき声が聞こえるが姿はどこにもなかった。ネオンの点滅するその文字を見ていたら、急に襲ってきた睡魔に瞼を閉じる。

夢の中の睡魔に疑問に思ったが、考える余地なく意識は途絶えていった。

目を覚ました呉が見たのは、白い壁と美音の姿だった。

「おはようございます。良い夢は見られましたか」

「いえ、全然。どちらかと言えば悪い夢しか見てないです。どこが癒されるようになるんですか」

「じゃあ、こちらに来て下さいな。答えが分かりますわ」

美音と外に出て、泳いでエレベーターに乗ると屋上と書かれたボタンを押した。そして動き出し、軽く重圧がかかる。

扉が開き、出てみるとそこにはコンクリートでできた地面に夜空に星が広がっていた。

「え、屋上ですか」

「ええ。こちらに行らして下さい」

美音は呉の手を引き、夜景が見える場所までたどり着く。

「上ってみて下さい」

「えっ。嫌です。僕は高い所が苦手です」

「分かっています。でも少し勇気を持って上ってみて下さい。私の手をつかんで下さい」

一段上にいる美音は切れ長の目をさらに細ませて笑った。その顔に引き寄せられるように呉は、美音の手をつかむ。乳白色のふわりと弾力がある手に、呉は少し耳を赤らめた。

少しの勇気を出してみる。瞼を閉じる。両足を一段高い場所にと移すと、体の重心が定まらず、風にさらわれそうになった。

そして、ゆっくり瞼を開けると色鮮やかな世界が呉の瞳に入る。ひんやりと背筋を伝う信号に怖じ気づきそうになったが、鮮やかな世界は心の内から凝り固まっていたものを休ませてくれた。

「綺麗ですね」

「ええ。綺麗ですね。こんな綺麗な世界を今まで見られないなんて損してましたよ」

呉は心から思った。確かにそうだと。今まで、勇気も出さずに避けた世界を恐怖も感じずに眺められる幸せを噛みしめた。

「人は行き急ぐ生き物だから、鮮やかな世界を知らずにいる。それ

はとても損なこと。私達はそんな人達に少しでも、癒やしや安心、居場所を創れればと思っています」

美音の言葉に心温まった呉は、礼を言い家に一度帰ると告げた。

「え。もうお帰りになるの。もっとゆっくりして行って下さい。泊まることも出来ますわ」

「そうしたいんですが、家には弟がいるんです。まだ十五でして、帰らないと」

「そんな。今途中で辞めてしまえばあなたが望んでいることを実現出来ないわ」

「すみません。また来ますので。弟が寂しがるんです」

エレベーターに乗る呉に美音は一緒に駆け寄って乗り込む。

「本当にお帰りになるんですの」

「はい。また来ます」

「……弟さんをこちらに呼んではいかがですか。そうすれば問題はないのでわ」

「いえ。学校もありますし。俺も仕事がありますので。今は何時ですか」

「えっ。ええっと、ちょっと待って下さいね」

そついつと美音は懐から、手の中に収まるくらいの大ささの乳白色をした四角いものを取り出す。ペンでなぞると、乳白色から色が溢れる。それは青の字らしきもので子供が塗りたくったような字だった。

「今は夜のジユウジ？頃です」

「十時ですか。急いで帰らなきゃ」

「何故ですか、何故そんなにも時間に縛られるのです。家族にも縛られて。あなたは癒されたいのでしょうか。だからここにこられたのに、何故帰るの。ここには永遠に約束されたあなたの望みを叶える所なのに」

静かに降りたエレベーターの前に、立ちふさがる美音をかいくぐり出ると番台は神経を揺さぶられるような満面の笑みで出迎えた。

「お帰りの際には、今まで楽しんだ分の金額をご請求させて頂きませす」

「はい。でおいくらですか。確か自分で決めて良いんですよね」

番台はその言葉に黒目をちらりと横に流し、決まり悪そうな演技をしながら話した。

「お客様。申し訳ございませんが、当店はお客様の望みを全て叶えた方のみ、お客様のおっしゃる金額を払って頂いて良いのですが、途中でお止めになる際は当店が出した金額を請求させて頂きます」

「はい。仕方ないです。おいくらですか」

番台は呉の顔をちらりと見やり、人差し指で長方形を描く。すると入って来た時に見た透明のボードが現れる。それを操作し、番台は呉に見せる。

「……え。あの。この金額はあっているんですか。こんな馬鹿高い金額、払えません」

見る間に呉は自分の全身から血がひいている感覚がした。手に力が入らなく、脱力感を感じる。

「一億四千万だなんて、そんな不当な金額」

「不当ですか。確かに。ではこうしましょう。お客様はここ、遊々楼閣のことは他言無用に。でなければ、この提示した金額をお支払い頂きます」

「……はい。分かりました」

どういう意図で隠しているのか、考えられなくもないが呉は言うとおりにした。もし他人に話と莫大な借金をしてしまうし、弟を路頭に迷わしてしまう。それを思えば楽だと思えた。

呉は承諾し、店を出た。

「もう少しここにいて下さりたかったわ。くれぐれも他人に話すことだけはおやめ下さいね」

美音の言葉は呉の脳に軽く奇妙な違和感とともに響いた。夜の暗さと冷たさに気を引き締め呉は家路を急いだ。

「お帰りなさい」

「ただいま」

コンクリートの古いアパート。

呉の住む部屋は四階にあり、鉄の軋む階段を上って行かなければならなかった。呉はいつも壁側を上っていた。手すりは下が見えて恐怖を覚えるからだ。でも今日は、怖いという感情を抱かずにすらすらと上っていったことを呉は、妙な気持ちとちよつとした幸せを噛みしめていた。そして、四十二号室の扉を開き弟が呉を迎えた。

「今日すごく遅かったね。何していたの」

「それはなあっ……」

弟の一言につい口に出そうになるのを止めた。普段、口の軽い方ではない呉だが、ふとした拍子に漏れてしまうのではないかと。

「いや。何でもない。潤、寝るか」

「うん」

呉は風呂も食事もせず床についた。思った以上に身心が疲れているようだった。

それから、楼閣にいる時の延長線上にいるかのような夢を見た。だが、悪夢のように酷く、呉はうなされた。そして起きると何も覚えてはいない。その繰り返しの日々が何週間も続いている。それと同時に、呉は楼閣の話有谁かにしたい衝動にいつもかられ続けていた。会社の同僚が最近、世間を賑わせている、大人が神隠しに遭ったかのように突然姿を消してしまうなどといったニュースの報道をそのまま呉に伝えてきても、呉は始終上の空で、まともに話を聞いて

いることはなかった。

呉の大半は、楼閣のことを話したい衝動に駆られているためにそれを抑えるためにお経を唱えるように、ぶつぶつと呟いていた。

ある日、同僚は呉の行動にたまりかねてなのか、ぼそりと一言もらした。

「なんかさー。神隠しに遭った奴もナゼか独り言をいう奴ばっかいたんだってさ」

呉は一瞬疑問に思い首を傾げたが、また何ごともなかったかのようになり、パソコンに向かいながらぶつぶつと言いだした。

同僚は、年のせいかな、働きすぎだろうと思いついて直してため息をひとつ吐いた。デスクには茶封筒に東薬会社と書かれていた。それを指でなぞって遊ぶ。

そして疲労を全身に抱えたまま呉は仕事と楼閣を探し続けている。

「兄さん、ここの所おかしいよ。仕事休んで、今日は家にいて。ハブ医者に見てもらって」

弟の優しい言葉に今はただイライラとしていた。

「仕事に行かなきゃ誰がここの家賃払うんだ。父さんの借金もまだ残っているしそれに……、それに休んでいられないんだ。行ってくるよ。それから、あれはヤブ医者だろ」

「違うよ。変なものばっかり診て、皆から煙たがられているからハブ医者だよ。無理しているとハブに見てもらおうよ」

呉は弟に手を振って家を出、足を進めた場所は楼閣があったと思われる道。前に見た看板はどこにも見あたらない。小道にも入って

みるが、直線だけで行き止まりだった。

「今日もか……」

あの日から二日後にここに来た呉は、楼閣がないことに気づいた。それから毎日来ているが、どうしても楼閣に辿り着けずにいた。

疲労が身体を蝕み、近くのレトロなカフェに入り程よい弾力の椅子に腰を落ちつかせ、一杯の珈琲を頼む。

「誰かに言いたい」

衝動と悪夢。この二つが呉を悩ませた。楼閣のことを誰かに話したい。每晚見る悪夢は、いつも不気味で暗くて高いビルから飛び降りる。そして地面に叩きつけられる直前で目が覚める。

楼閣で見た夢とは違う。確実に前よりも高所恐怖症が酷くなっていた。

会社は幸い六階建ての一階なので普段、困りはしないが、セール業をしている呉は二階に行くことはなかった。

一番困るのは、自分の住む場所だった。四階建ての古い造りなのでエレベーターはなく、錆びた鉄の階段は上がる度に今にも外れそうな音をたてていた。

「お待たせしました」

定員の明るい声に、呉ははっとし持ってきた珈琲を一気に飲むとして火傷をした。

「アツツ、すみません。お手洗いはどこですか」

「あ、はい。あちらの方になります」

呉はトイレに駆け込む。広々として清潔感のあるトイレだった。鏡での前で腫れた口と舌を確かめ、水を口に含みはき出す。それを何度か繰り返した。ひりひりと痛むのを押さえ、呉はトイレに入ろうと戸を開いた。

すると、見たことのある風景が広がっていた。

後編

一面白い壁に見覚えのあるカウンターと、見覚えのある面子が呉を出迎えた。

「ようこそ。遊々楼閣へ……っ呉様？」

出迎えた美音はあきらかに驚愕した。呉とまた会ったかと思っていたいなかったという表情に呉は、血管が一本、輪ゴムが伸び切れた時みたいな音をたてた。

「入っていいですか」

「えっと……」

苦い顔をし、眉間にシワを寄せた美音。あきらかに何かを隠しているのだと思った呉は、問いつめるように中に入る。

「呉様、いけません。もう来てはいけません」

「何ですか」

「……一度出てしまったからです」

理解に苦しむ一言に呉はすたすたと歩いて行く。

「駄目です。呉様。今入ってしまうとご家族には二度と会えません」

「えっ」

歩みを止めた呉の腕を引っ張り出て、トイレの扉を閉めた。

「呉様、良くお聞き下さい。この楼閣は人々の夢を糧に運営される処なのです。夢は人に売れるのです。良い夢や悪い夢を見る人がいなければここは成り立たないのです。ここを一度出て行ってしまったものは必ずここに帰って来るか、ここのことを喋って……」

美音はそこまで言うとき口を片手で押さえて下を向く。静寂が辺りを包む。

それを破ったのはトイレに入って来た中年の男性だった。男性は二人を見るとバツが悪そうにそそくさと出て行った。

「……どうなるんですか」

「それは……楼閣の中で一生カプセルの中に入れられて、悪夢を見させられる実験台になります」

「実験台？悪夢を見ることが」

「ええ。それによって人間にどのような作用を働かすものかの実験です。やりようによれば夢は必要としている機関に売ることが出来ますから」

美音が口にしたそれは、表だってはあかさされないことだった。良き夢は情緒不安定な人に薬として渡され、悪夢は罪を犯した人に渡される。

使い方は様々あり、用途によって異なる。それゆえに実験台になる人間と夢を見る人間が必要だと美音は語る。

一度外に出たいと言った人にはあらかじめ仕込んだ薬が働く。こ

れは夢を見て一時は夢の作用があるが、それが切れると同時に強い反発心が生まれ、言うてはいけないと言われたことを言いたくなくなってしまう。してはいけないと言われたことをしてしまふ。

そんな強い作用が薬の中に入っている。

「どうしたらいいんですか、こんなんじゃないやまともな生活なんて送れないじゃないですか」

「……薬が、あるんです。それは先ほど言ったものを抑える薬です。でも、それは……」

「何なんです、教えてください」

「支配室の部屋にあるのですが、その部屋に入れるものは支配人と番台だけです。専用の鍵を持っていますの。それにセキュリティも万全ですし」

「何とかならないんですか、あの番台さんに言ってみるとか」

「……とても規則に厳しい方ですから無理かもしれませんが。休憩時間なら鍵を金庫室に置いていくんですけれどもそこなら何とかなるかもしれませんわ」

「本当ですか。ありがとうございます」

呉のさつきまで鬱積していた気持ちが少し晴れる。美音は苦い顔をしたものの、最後には決心を固めたようで、トイレの戸を開けて美音は呉の腕をひっぱり入っていった。

中には、前にもまして高級そうな骨董品や、初めて見た金箔をあしらった料理などが運ばれていく。

「なんか凄いですね」

「ええ、最近支配人が変わりまして勧誘も大規模なものになってきたんです。ここを大きくして自分だけが欲をかきたいのです。私はそんなことをするものは大嫌いなのです。だからとゆうのもありませんし、懺悔の気持ちもあって呉様をお救いしたいと思っています。初代の支配人は違いました。夢の中に閉じ込めておくなんてことはしませんでしたわ」

人の出入りの少ない廊下を選び、なるべく音を立てずに早足で行く。

途中、美音を呼ぶ声がし、呉はここに隠れるように言われ、その場所に身を潜める。

入った部屋は暗く、目がなれるのに時間がかかる。しばらくしても美音は帰っては来なかったため、呉は辺りを見渡し、なれてきた目を凝らして周りを見渡す。

暗がりには寝台らしきものが一台ある。人が寝るのにはぴったりの大きさで、近くに行くと人らしき物体があることに呉は気付く。

それほど目の悪くない呉だが、人には見えない異様な感覚と人であって欲しいと思う願望が心の中を混ぜていた。

足を一步踏み出すたびに近くなるそれは、次第に色が人の皮膚の色ではなく、深く暗いコケがはった水海の奥底の色のような、とてもグロテスクな色をしている。

「うわっ……」

鼻をつく異臭と皮膚がぶくぶくと心音にあわせて中で空気を入れたり出したりしているようだった。吐き気をもよおした呉はしゃがみ込んだ。

するといきなり明るくなる室内、とつさに呉は寝台の下に隠れる。光に満ちた室内は、真つ白になる。呉は眩しさに目を閉じた。そして呉の耳に聞こえた声。

「確かにここか？」

「ええ。私は確かにこの部屋に入るように促しましたし、入るのも見かけましたわ」

「居なければ意味がない。探し出せ」

そんな声が部屋中から響く、少し声が割れていて、どこからか通して聞こえているみたいだと思つた呉は薄めを開く。

声の主は上からだつた。天井はガラス張りで、二人の男女が下を眺めている。一方は白髭を顎から鎖骨の辺りまでたらし、上唇の上には八の字に髭が伸び、先端はくるりと丸くなっている。そしていかにも強欲な目つきをしている男。もう一方は、呉自身もよく知っている人物、美音だつた。

先ほどまで呉と一緒にいた。案内して、助けしてくれると言つた美音は、白髭の男と今、呉を探している。

舌を唇に這わせ、下唇をかみ締める。助けしてくれると信じていた人物に裏切られ、悔しくて怒りが喉の奥から込み上げてくる。

しばらくして、二人は奥に引つ込んで行つた。

呉は、四つんばいになり這いながら出口を探す。すると小さなボタンを見つける。それを軽く押して見ると機械的な音が、小鳥がなぐ程度の小さな音で聞く。人、一人が四つんばいの状態で通れそうな四角い通路みたいだつた。

そこを通り、進んでいく。途中、先ほどの寝台に寝かさされていた人の形をしたものを見ると、肩と思われるところから糸とざくつと何かが切り落とされたような音がしたと思えば、そこから下が床に

転げ落ちていた。

呉は息を呑み、手に汗がじんわりとにじんだ、だが止まったまま
でいると追いつかれて食われそうな気がした。

早く、早く。そう思いながら呉はどこに行くかもわからず前進し
続けた。

音も人の気配もしなくなっただけから、ずいぶんたち、やっと出口が
見つかった。

格子を外すと、シツクな深い赤と黒で統一された部屋に行き当た
った。

「どこだ」

シンプルに配置された家具は無駄がなく、生活感もない。

机や椅子、机の後ろに置かれた戸棚に書棚は横に長く縦は天井
と同じ高さだった。そしてダブルベッド大きさの白くシンプルなベ
ッド。そして、ここでは初めて目にする窓。

呉はここが支配人室かもしれない、そう思い机や戸棚を調べる。

だが、全てを見ても薬の影ひとつなかった。

もう探すところが無くなった呉はベッドを探し出す。

何もないかと諦めかけたときに枕の下にあるものを発見する。

それは、透明のカプセルに入っている錠剤だった。

これが例の美音の言っていたものなのか、分からなかった。美音
は裏切りもので、所詮は歯止めになるような薬なんてないのかもしれないのだと呉は思ったが、ここに来て何も持ち帰らないのも癪に
さわり、それをポケットに入れる。

すると、よく聞きなれた金属が重なり回す音が聞こえ、呉は反射
的にベッドの下へ潜り込んだ。

「君はよくやってきているが、一度ここに入ってきたものは二度
と外には出してはいけないだろう。わたしが開発した薬をカプセル

に混入させておいて正解だったな。まだ試作品の段階だが、効き目はある。そう分かったからな、お前のお陰でな」

白髭の男、支配人は椅子に乱暴に腰掛け、満足げに葉巻を口にくわえて煙を吐いた。

「すみません。なんとか止めようとしたのですけれども……。でも流石支配人ですわ。そんな薬を混入させておくなんて」

「だろう、ちゃんとそれを止める薬も作つてある。ここを出たいと思った人間には、別の人間を提供してもらわねばならないからな」

そう言つて支配人はベッドに行き、枕の下に手を入れる。最小限に息をしながら身を潜めていた。

「ない。ここに置いてあつた薬がない。先ほどの侵入者の仕業か、まだ捕まえていなかったのか美音」

「はい。すみません。ですが、ここに入るのには鍵がいります。でもそれは支配人と番台がちゃんと持っているではありませんか。どうやってここへ来ると言うのです」

「どうせ、お前が手引きしたのだろう」

怒りを込めて、美音のところへ歩いてきた支配人は、右手を天に上げ、そのまま美音のほほに振り下ろした。

部屋中に、張り詰めた音が響き、美音は床に倒れこむ。

「役立たずで、裏切りものが。わたしの実験の邪魔をするなあ」

そう言つと今度は、足を上げ、振り落とそうとしていた。

呉は見かねて、ベッドの下からはい出て、支配人の脇に突っ込んだ。体制を崩した支配人は尻餅をついた。

「き、お前……、侵入者だな。やはり美音がやったのだな」

「呉様、何故出てこられたのです」

美音は片眉をつり上げ、呉を見上げた。呉の顔には光が乏しく無表情で、口を真一文字に引き締め、強張っているようにも見えた。

「お前だろう、薬を盗んだのは」

「ええ、そうですよ。わざと楼閣のことを喋らせて金儲けや、実験台に出来る人を探していたなんて思ってもみなかった。あなた達は人間をどうしたいのですか」

「どうしたい？そんなの決まっておるだろうが、人間の夢でこの城が動くこと、それだけでは飽たのだよ。もっと有効に合理的にも、事は運んでいける。わたしの学者としての研究の成功に金、それを手に入れようとしているだけだ」

たつぷりとした自信満々な態度。悪びれることはない。

呉は薬をポケットから取り出した。

「あなた、もしかしてご自分でも試されたのではないですか、薬の入ったカプセルで夢を」

「五月蠅い、薬を返せ」

「取り引きしませんか」

薬を持った手が熱を奪われ、全身が糸で引つ張られているみたいに、自分の意志とは別の行動をとりたがる。

「震えながら偉そうな事を言うな。早く返した方が利口だぞ」

「嫌です。条件を飲んでいただけならこの薬は俺がいただきます」

「馬鹿を言うな、その薬はこの世にはまだ三粒しかないんだぞ。たった一回分しかないのに何故お前に渡さなければいけない、ふざけるな」

「だったら条件を飲んでいただけますね」

支配人は白髭を摘むようにさすりながら、渋った顔付きをしたが承諾した。

「俺と美音の二人をここから出してくれ、そして二度と関わらないでくれ。俺の家族にもだ」

「いいだろう。承諾した」

支配人は青白くなっていく顔をひきつらせ、机の引き出しを開けた。そこから白いリモコンのような物を取り出し、並べられた数字を両方の親指で押すと、敷き詰められた本棚が開く。

暗い通路は三秒ほど経つと一斉に白光した明かりがつき、通路の中を照らす。天井や壁、床は白いタイルで出来ており、触ると無機質でひんやりとしたタイルの冷たさが呉の指から伝わる。

「ここを真つ直ぐに行き、突き当りを左に行け、そうすると右手に一枚の扉に突き当たる。その扉を開ければもといいた場所に戻る。さあー、薬を寄せせ」

美音を側に着かせ、支配人の手のひらに持った薬を渡そうとして開いたと同時に、美音は薬を奪い取り、支配人を押し倒し、再び呉の手に握らせた。

困惑する両者をよそにリモコンを奪い取り、閉と印字されている文字を押す。

「何をしているんですか、早くーっ」

呉が言いかけたと同時に、部屋に響くけたたましい音と共に美音は閉まりかけた扉に手をつき、呉に微笑む。

「早く行って下さい。私はこの住人です。ここ以外では暮らせません。分かって下さいまし。薬は必ずここを出たら飲んで下さいね」

無情にも扉は閉まった。呉は扉に手をつき、膝から崩れ落ちるように座り込む。

腹部に痛みを感じた。手で腹部を押さえると、硬い無機質の物体の感触がした。

「つつ、血？」

腹部にのめり込むように、弾丸がはまってあり、そこからじんわりと赤く水彩で描いた花のように外へと広がる。

美音は銃で撃たれ、そのまま貫通して呉の腹部に当たったのだった。

呉は腹部からかすかに出ている弾を取り出す。呉の手にはきのこのように変形した弾がある。それを軽く握りしめた。

「美音を助けなきゃ」

扉の向こう側にいる美音。もう生き絶えているかもしれない。だが諦めきれなかった。

呉は手に力を入れ、扉を開けようとするが開くことはない。ただの壁のようにも思えばじめた。

がむしゃらに何度も何度も試みたものの、ただ手のつま先が赤く腫れただけだった。

「クソっ。開けるよ」

今までの呉らしくない下品な言葉遣いで。

すると、今まで明るかった通路は耳に聞こえた小さな音とともに一瞬で暗くなった。

「何だ……」

暗闇に慣れていない目のせいで何も見えずにいた。すると、縦に一筋の光が見え、それはだんだんと長方形へと扉がゆっくりと開いたのだった。

強い光に目がくらむ呉。鼻をつく異臭。鉄が錆びて朽ちかけた時のようなそんな匂い。

視界がクリアになると、そこに立っていたのは顔から足先までを血に染めた美音の姿だった。

赤い血が水溜りのように広がっており、その上に転がる物体。体が銃で撃ち抜かれただけと言うようなものではなく、体の表面がある寝台で横たわっていた深いコケの色と似ていた。

流れ出すのは同じ赤い血。匂いも部屋中に籠もって濃厚だが鉄臭いのに、皮膚だけが人とは別の生き物のように思えた。

「何故、まだここに居るのですか。呉様」

眉一つ動かさない表情のまま、美音の言葉には微かな棘と呆れが含まれていた。

「何をしたんですか。その人に……。それに美音は撃たれて」

「ええ。撃たれましたわ」

そう言うつと服を巻くし上げ、傷口を見せた。美音の左腹部には弾が貫通した後があり、それは後ろの情景をクリアに映していた。

美音は軽く咳をする。それは乾いた消化器官が圧迫されて、聞くだけで苦しそうだった。

呉を見下ろしていた姿勢から、視線を同じ高さになるようにしゃがんだ。

「呉様にこんな姿など見せたくありませんでしたわ。こんな姿など……」

「何があつたんです」

扉をかきむしり赤く腫れた手で美音に触れようとするが、美音は首を横に振り拒否した。

「触らないで下さい。私は、私たちは人ではないのです。それにもう私も病原菌に侵されていますわ。数ヶ月前にカプセルに混入した病原菌は、人間のあなたにも移るのです。ただ触れるだけで。細胞

を侵食していく。あの寝台にいた人間は支配人を巧みな話術でそのかしたのです。旨い儲け話があると。でもそれは違った。ここに帰ってくるようにと強い作用の薬に、夢を永遠に見たいと思う副作用を。夢を見続けた者はあのようになるのです」

「寝台で寝ていた者は何故自らカプセルに入って夢を見たのですか、何故わざわざそんなことをする必要が」

「眠り薬を使ってカプセルの中に入れたのですわ。呉様、私たちもあのカプセルで眠るのです。夢は私たちにとつても栄養源なのです。それにあの者はあらかじめ薬を入れておいたのです。それが広まり、支配人は逆手にとろうとした。抵抗できる薬さえあれば、そんなものなど怖くはないのだと」

美音は言い終わると床に崩れるように膝をついた。息が苦しさに乱れている。

「それで人を集めて夢を見させていたのか。夢に縛り付けにして、現実の世界に帰ってこられないものがあるけれど、その人たち、今はどこにいるんです」

呉の言葉に美音は口を真一文字に閉じる。

「もういませんわ。感染して死んでしまったから」

重力がいきなり傾き、呉は右手を壁についた。美音も左手を床につき踏ん張る。机や棚に置かれた本も音を立てて床に落ちて行った。地震のような揺れもくわわり、いつそう床の上はひどくなり、天井からぶら下がっているシャンデリアは繋いでいた鎖が引きちぎれ割れた破片が美音に降りかかる。

「美音っ」

呉は美音の腕を掴み通路に引き寄せた。美音の腹部から生温かい血が溢れる。

息を詰まらせ、呉を見上げた。鋭く、射るように。

眼光から何を言いたいかを察した呉だが、分からないふりをした。そうして、通路を美音を抱えながら渡る。

「止めてくださいまし。薬を飲んでも私は助かりませんわ。自己満足でこんなことをするのは止めてくださいまし」

美音が激怒することは承知でしていた。でも、呉は呉が美音に対する想いがあったてそうしたのだと、気づいてほしかった。美音の唇をそつと塞ぐ。

「ちょっと黙ってて下さい。誰が駄目だなんて決めたんですか。薬なんて物は作ればいいし、美音が人じゃないってゆうんなら、それなりの医者に見せることにするよ。一人知ってるからさ」

上下に揺れ、通路の明かりも点滅をし始めた。この建物内で崩壊が始まり、遠くでは悲鳴のような音が聞こえたが、それは美音の耳にだてけしか入らなかつた。

呉の真横の壁が、大きな傷口のように音をたてて開く。

砕けた破片が床に散らばり足の裏を刺激する。

五分か十分か、時間の経過があいまいな次元にいる呉の目に通路は突き当りになっているのを見て、到達するとそこを言われたとおりに左に曲がる。

するとそこには、あるはずの扉は存在しなかつた。

「どづいつことだ……。扉がない」

通路は五メートルほどしかなく、右手にあるはずの扉はただの壁で手で押しても叩いても何の変化ももたらさなかった。

「呉様降ろしてくださいまし」

そう言い、降りた美音は壁に手を置き力いっぱい押すと、壁は向こうに手のひら分位の長さに押された。小さくカチツと乾いた音が鳴ると壁が一瞬にして扉に変わる。

呉はその扉のノブに触れると、今曲がってきた所の壁が地響きと共に血管みたく亀裂が入る。そしてそれは扉のすぐ横にまで入っていた。

呉はすぐ様ノブを引き開けると、そこは入ってきたときと同じトイレの中だった。外に出た呉は振り返り美音の手を掴もうとしたが、すり抜け空を切った。

「行けません。どうかお許し下さい。私は、私自身を許せません。人間を巻き込んだ罪は重いのです」

「美音……待っ」

口を真一文字に結び、頬にひと筋の涙が流れていた。美音を見たのはその時が最後だった。扉は閉められ開ける事は出来ない。ただの、何の変哲も無い壁だったのだから。

呉は叱咤して壁を思い切り叩いた。トイレ中に響き渡る。悔しさに扉にもたれ掛かり臉を閉じた。

――あれから数ヶ月が過ぎていた。呉が戻ってきたあの日からぱつと神隠しの事件は無くなっていたが、帰ってきたものは一人もい

ないと言う。

あの出来事を言いたいという欲求も今は無く。生涯何があってもこの出来事だけは心の内に秘めておこうと呉は決めていた。どんなに弟に問いただされたとしても。

例え現実で起こった事ではなく夢だったとしても、他の人に話してしまうと本当に淡い夢の様になってしまうし、いまいそだったからだ。

ただ、今でも高所恐怖症は治ってはならず、いつも家に変える時には苦勞していた。

「兄ちゃんお帰り。大丈夫？」

「ああ。大丈夫だよ」

呉は弟の頭を軽く撫でた。にこにこ満面の笑みで部屋の中に入って行く。

夜、床に着くと夜な夜な夢を見る。それは、叶う事の無い夢だった。

後編（後書き）

感想や批評などありましたらお気軽に下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8934b/>

遊々楼閣

2010年10月16日14時48分発行